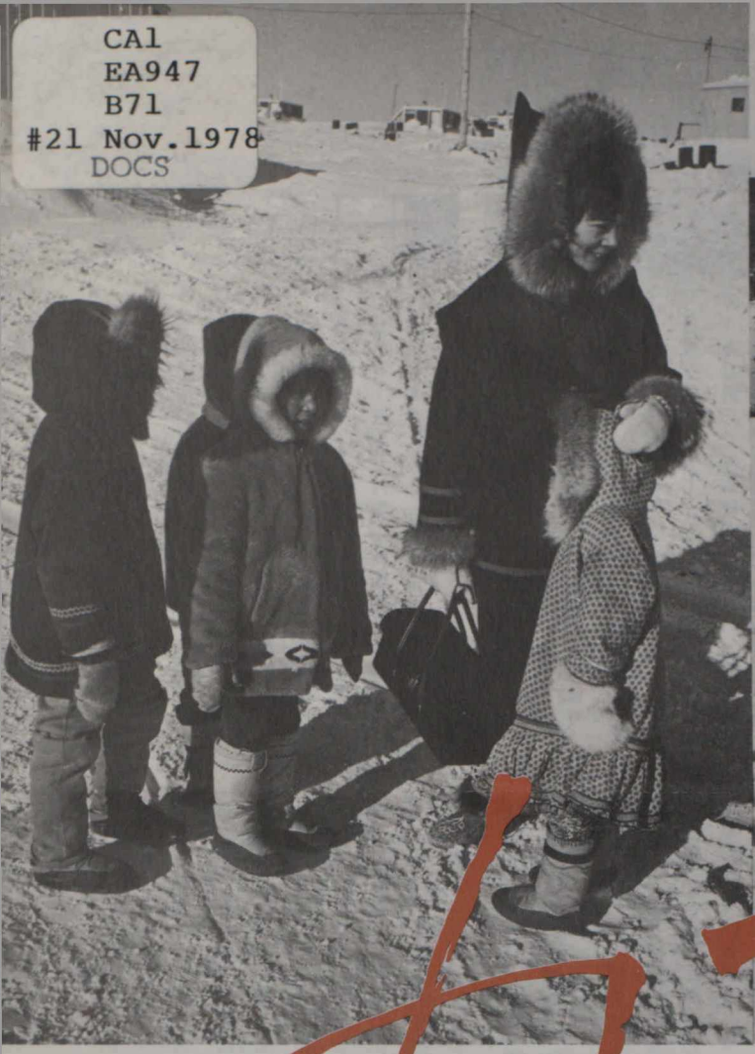
CA1
EA947
B71
#21 Nov.1978
DOCS



カナダ

1978年11月
No.21

LIBRARY E A / BIBLIOTHÈQUE A E
3 5036 01030003 9

カナダ北方特集

トピックス―― 2
カナダの北方―― 3
北極の旅―― 5
エスキモー
――その歴史と暮らし―― 8
北方の資源開発と環境―― 9
北極海で進む
石油・天然ガスの開発―― 12
書評―― 14
カナダの生活の中から―― 16
編集後記―― 16

EXTERNAL AFFAIRS
AFFAIRES EXTERIEURES
OTTAWA
MAR 29 1979
LIBRARY / BIBLIOTHÈQUE

60984 81800

Bulletin Canada
発行　カナダ大使館

■トピックス

カナダ極地に自然保護公園
トナカイや野鳥の宝庫

カナダのユーコン準州の北方からアラスカにかけて、寒冷地特有の野生動物が多い。沿岸に広がる平原は渡り鳥とトナカイ、ブリティッシュ、バーン、リチャードソンの各山脈はトナカイ、そしてオールド・クロウ川やユーコン川流域は渡り鳥の生息地として知られる。

トナカイ（ポーキュパイン・カリブー）の数は、およそ十一万頭といわれ、アラスカ北東部からユーコン北部、ノースウエスト準州の一部にかけて、群れをなして移動する。大自然の中で生存している数少ないトナカイだ。

また毎年、夏や秋になると、一帯には何百万羽というガンや白鳥、鴨、アビ、シギ、カモメ、アジサシなどが、飛んでくる。渡り鳥にとって、格好の繁殖地である。

ここは、さらに世界で最もハヤブサの多いところでもあり、そのほか、北極グマ、黒クマ、北極アオグマ、金ワシ、北極チャー（イワナの一種）の数少ない生息地でもある。

このような極地の生物を保護するために、カナダ政府はこのほど、四万平方キロ（日本全土のおよそ十分の一）にものぼる広大な地域を、カナダ初の国立自然公園に指定した。

この決定を発表したヒュー・フォークナー北方大臣は、「一帯を保護する価値は、開発による利益よりも大きい、と判断した。この結論は、（パンプライン建設に関する）バージャー判事の勧告やエネルギー庁の公聴会で示された証拠によっても、裏づけられている」と述べて、意気ごみのほどをみせている。

発表によると、公園指定はインディアンなどの土地所有権に関する話合いや、一帯で行なわれている狩猟・漁業・わな猟に影響を与えるものではない。また、資源開発のための新たな土地利用は禁止されるが、既存の開発権はそのまま認められることになっている。

日系三人にカナダ勲章
日本語教育の佐藤氏など

ほとんど半世紀を日本語教育に捧げた佐藤伝氏、永年にわたって華道の紹介・普及に努めてきた桑原正尚さん、そしてカナダのトップ官僚として過去四年間連邦財政を動かしてきたトム・ショーヤマ（生山国人）氏に、十月十八日、首都オタワの総督邸でカナダ勲章が授与された。日系人が一度に三人も同章を受けるのは、これがはじめて。

佐藤氏は、一八九一（明治二四）年、福島県東白川郡近津村（現棚倉町）で生まれ、東京の青山師範学校を卒業。東京渋谷区の大和田小学校で教師をしたあと、文部省からバンクーバー日本語学校の教師として派遣された（一九一七年）。

その後、同校（正式にはバンクーバー日本共立国民学校、のち共立語学校、日本語学校と改称）の校長となり、その半生を英子夫人と共にカナダでの日本語教育に尽してきた。現在は、バンクーバー日本語学校の名誉校長。「子どもと共に五十年――カナダ日系教育私記」（夫人との共著）など、著書も多い。

桑原さんは仙台生まれ。東京の共立女子学院を卒業したあと、一九二三年、カナダへ移住。すでに習得していた小原流盛花に加えて、竹屋流盛花投げ入れや盆景を修業し、バンクーバーのインタナショナル・クラブで茶の湯、日本語、生け花を教えた。

戦後は、モントリオールで幼稚園設立にあたるほか、華道竹屋流クラスを開設するなど活躍。竹屋流家元の参与で、カナダ竹屋流本部の設立も認められている。昨年は、英文カラー版の「いけばなと私」を出版して、好評を得た。

ショーヤマ氏は、両親が熊本県出身。一九三八年に発行された最初の日系英字紙「ニュー・カナディアン」の創立者の一人で、戦後はサスカチュワン州政府の高級公務員をへて、一九六四年、連邦政府の経済理事会に加わった。

その後、大蔵事務次官となり、カナダ政府の財政運営では最大の実力者といわれている。

補欠選挙、野党が勝利
大勢には影響なし

死亡や辞任で空席になった議席を埋めるため、十月中旬、連邦下院の補欠選挙が行われ、野党の進歩保守党が十五議席のうち十議席を獲得した。選挙前と比べると、保守党が四議席追加し、与党の自由党が七議席から二議席に減り、新民主党が一議席加えて二議席を獲得した。社会信用党は選挙前の一議席を守った。自由党が失った選挙区には、オンタリオ州の五議席が含まれている。

中間選挙の結果、各党の下院における勢力は次のように変わった（カッコ内は一九七四年の総選挙による議席数）。

自由党　一三六（一四一）
保守党　九七（九五）
新民主党　一七（一六）
社会信用党　九（一一）
無所属　五（一）

これで見るように、自由党は依然として下院二六四議席の過半数を占めており、大勢に影響はない。

中嶋氏が釣りの油絵展

釣人として、また釣人を描く画家として知られる中嶋憲氏が、十月はじめ、東京の三越本店新館ギャラリーで、ユーコン川や太平洋など、カナダの雄大な自然の中で釣りをする姿を描いた作品を展示し、釣りファンを喜ばせた。

同氏の作品は、全国各地の三越ギャラリーで展示されることになっている。

中嶋氏がカナダ大使館に寄贈した絵を前に、左からランキン大使、ジム・マーレー（ＢＣ州サーモン・ダービー会長）、中嶋、高田弘之（日本ルア釣り連盟事務局長）の各氏。

カナダの北方

それはツンドラと氷だけではない

ファーリー・モーワット

北方の実情を理解する上でまずぶつかる問題は、その「北方」がどこで始まるのかを定め、その境界をはっきりさせることだ。科学者に「北方」の定義を求めれば、たちまちボーリール（「北方の」という意味）、サブアークティック（亜北極）、アークティック・ゾーン（北極帯）、アイソサーム（等温線）、ディグリー・デイ（気温偏差日）、パーマフロスト・リミット（永久凍結土限界線）といった言葉を、うんざりするぐらい聞かされるだろう。

本当のところ、特にどこから北が北方だという境界はない。そういうものは、われわれの頭の中に存在するだけだ。これは、ロケットで打上げられた宇宙飛行士の状況に似ている。どの高さで彼は宇宙に突入するのだろうか。それはある特定の高さではない。別の世界へ入ったんだ、と彼が自分で意識するとき、彼は宇宙に突入するのだ。

南に住む大半の人々にとって、カナダを東端から西端までつないでいる針葉樹を中心とした幅広い樹林帯、すなわちタイガの北辺のどこかで、「北方」がはじまる。他の人々は、森林と北極海の間に横たわり、北極海諸島までおおっている一面の大北極平原、すなわちツンドラの南辺に、北方の起点をみる。

しかし、ツンドラとタイガの間に、はっきりと定められた境界線はない。お互いの中にとけていってしまうのだ。

この混ざり合った地域は、また、大陸の東西にきちんとのびているわけでもない。北方はまずユーコン準州の西北端、北極沿岸に近いところから、南東（北東ではない）にカーブを描き、ハドソン湾岸のチャーチルから数マイルに迫る。それから真南へ下るようにしてジェームズ湾の先端までのびたあと、方向を逆転して今度は北東へ進んでケベック・ラブラドール半島をつっきり、ラブラドールのネインに近い大西洋沿岸に達する。

ときに〝樹木線〟と呼ばれているこの線が特異な方向に動いているため、極西部ではタイガが北方を支配して、マッケンジー川の谷間から北極海までのびているのに対し、極北の東部では、オンタリオの北端にまで北極グマや北極産トナカイが生息するほど、全般的にツンドラが南へ深く入り込んでいる。

タイガと、タイガに狭まれたツンドラは、わが北方地域の陸地部分をなすもので、面積にして二百万平方マイル（およそ五百二十万平方キロ）、カナダ全土の半分以上という、膨大な大きさである。さらに驚くべきことに、カナダの北極海沿岸は、その太平洋沿岸と大西洋沿岸を合わせたものよりも長い。カナダの北方は、ちょうど北アフリカがヨーロッパの地中海に面しているのと同じように、（陸に囲まれた本当の地中海をなしている）北極海に面しているのである。

まさかと思う向きがあるかもしれない。しかし、アジア、ヨーロッパ、北アメリカが、お互いに、ほとんど陸地で囲まれたこの北極海をはさんで向かい合っており、また三つの大陸がここで一番近接し合っているという事実を、私たちは知っておく必要があろう。

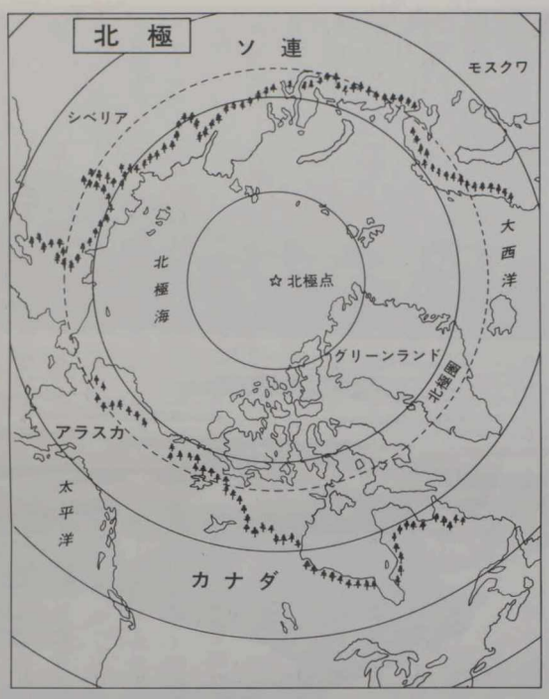
普通の地図をみて、北極点がはるか地球の頂点になっているように思うのは、独断的であり、誤りである。本当の地球は、そういうものではない。

北極地域は、実際には北半球の中心である。またカナダの地理的中心は、チャーチルから百五十マイル（九十キロ）西北のキーワティン・ツンドラにある。つまり、私たちが北方を背にして立つと、カナダの大半だけでなく、ヨーロッパおよびアジアも私たちの背後にくることになる。

今までのところ、この厳正な事実を認識しているのは、死と破壊に関心の強い軍人のみである。カナダ人に、もしも北方のもつ平和的意義を察知するだけの分別ができれば、これまでのようにアメリカ合衆国の裏門でゴマをする衛星国にとどまることなく、（世界の）中心に位置する国になれるかもしれないのである。

北方について中々消えない誤解のひとつは、ただ殺風景な凍結した海が一面に広がっているだけだとか、そのほかにはせいぜい凍った森林とツンドラの荒野があるだけだ、ということである。北方は地球上のいかなる大自然界にも劣らないほど多様性に富む、というのが真実だ。

中央ラブラドール沿岸からエルズミア島へと北上する、カナダ楯状地（たてじょうち）の上向きに褶曲した東端は、氷河と小木におおわれた山脈をなしていて、その偉容さはカナディアン・ロッキーのどの連山と比べても遜色はない。北米の東部には、これら



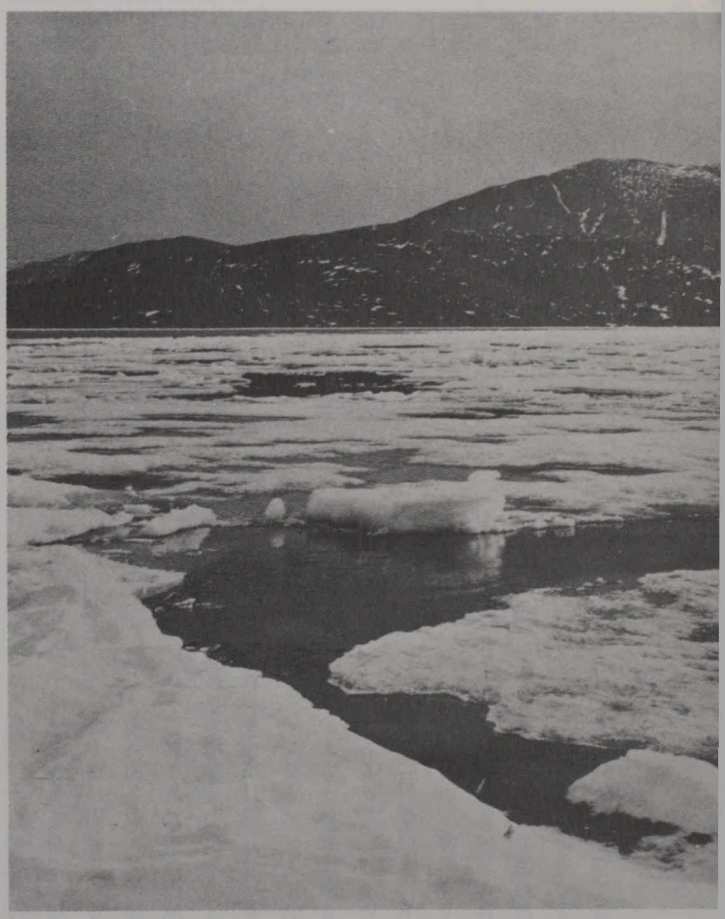
の山々に匹敵するものは何もないけれども、大方の人々にとっては未知の存在だ。これらの山々は、北方の東壁をなしている。

ずっと西へ進んで、マッケンジー川を越えると、連山また連山と続く。その尾根をなすセント・エリアス中央山塊の山山は、六千メートル以上に及び、その頂きは氷河におおわれている。北方の西壁である。

これら二つの壁の間には、すりへらされ、またくぼみだらけのカナダ楯状地が不規則に広がる。地球上最古の部類に入る岩石でできているカナダ楯状地は、何百万年もかけて侵食されたために、昔の雄峰はすっかり滑らかにされて、起伏した丘として残っているのみである。それが、ツンドラやタイガでおおわれた地表をデコボコにしている。

この楯状地帯には、地球最大の湖水群もある。楯状地の西端とユーコン山系の間には、北アメリカの中央大平原から北上してのびるタイガ低地の地溝が大きく広がる。勇壮なマッケンジー川が、ピース川、リアード川、およびその他多くの河川の水を、この地溝を通じて北極海へ運ぶ。

大陸の北側には、世界最大の島嶼群を形成し、何千平方キロもの陸地を占めるカナダ北極諸島が並ぶ。これらの島々も多種多様だ。山岳の多い島もあれば、海面すれすれの低い草原になっているのもある。島々の周囲は入江や海峡がジグザグに入り組んでいて、まるで迷路だ。これらの島々の沿岸線の長さは、全体で約一万六千キロ。地球の円周よりも長い。



カナダの北方領域には、ハドソン湾を含む大きな内海もある。そこは、英国諸島が跡かたもなく消えてしまうほどの広さだ。

北方地域の東側にはラブラドール海流があって、膨大な量の氷を運んでバフィン湾からノバ・スコシアまでのびるデービス海峡へと流れる。北極海も一種の〝陸地〟といえよう。つねに氷におおわれていて、氷は動いているけれども、人びとはその上を旅し、飛行機も離着陸するからである。

北方の骨組みをなすカナダ楯状地は、五百万年にはなるだろうけれども、陸地の多くは新しくみえる。それは極北西の部分を除いて、わずか十万年前にはすべて巨大な氷原の下に埋まっていたからである。キーワティン氷河は、円頂部で一キロ以上の厚さに達していたこともある。そのあまりの重みで氷はアメ状となり、円頂形になった中央部から四方八方へどんどん移動していった。氷河は、移動しながら、古代の岩石をえぐり、表土層をそぎとり、そのあとに水をたたえた谷間や盆地、深く切りこんだ沿岸のフィヨルドを残していった。

氷がとけてしまうと、陸地は氷河の堆積物がちらかり、堆石のうねや丘陵（ドラムリン）、それに砂や小石の長く、曲りくねったエスカ（堤防状の丘）がむき出しの骨格に複雑な模様をつけた。

氷原の形跡は今でも残っている。東部山岳では、およそ二万三千平方キロもの氷河が山壁や谷間をおおっている。西部の山々でも、氷河はまだ名残りをとどめている。

氷河期の厳しい気候は、目に見えないもうひとつの結果をもたらした。氷河の下の岩石が冷凍されて、永久凍結土になったのである。これは、極北の島々では、太古の岩石に深さ五百メートルも入りこんでいる。かなり南に位置するマニトバ北部でさえも、古代凍結層は、わずか一メートルの地下に残っている。表土層は夏になるととける。

北方の気候があまりに厳しく、北極グマとエスキモー以外には耐えられない、という神話もなかなか消えない。ところが、北方で最悪の気候といっても、西部平原の冬の大吹雪と大差ない。サスカトゥーンやウィニペグで一冬の間耐えた北方の住民が、北方を〝バナナ・ベルト〟（熱帯）と呼んだ、といわれるぐらいである。

北方は、驚くほど雨や雪が少なく、乾燥した世界である。真冬の雪は、北方の各地よりもオタワやトロントのほうが多くつもるほどだ。北方の冬がさわやかだとは、イエローナイフ（北西準州の首都）商工会議所でさえ言うまいが、トロントの冬より厳しいというほどではない――もっとも長いことは長いが。夏は場合によっては快適だ。本当の季節は、夏と冬の二つしかない。その間のつなぎの季節は、あっという間の短かさだ。

北極圏の北では、真夏の太陽は沈むことがなく、気温は毎日、華氏六〇度（摂氏一五度）代か、それよりもっと暖かくなる場合もある。北極圏から北の冬は、太陽が何週間、あるいは何か月も消えてしまう。もっとも、この〝長夜〟がまっ暗になることは、ほとんどない。北極光（オーロラ）があたりいっぱいに輝き、すみきった空に星がまばたき、月もこうこうと地上を照らす。普通に動き回るには、じゅうぶんの明かるさである。

北極の旅

江本 嘉伸

北極が無毛の土地と考えるのは、ばかげた幻想だ。タイガには白黒トウヒ、ジャック・パイン（松の一種）、から松、かばの木、ポプラなどが生い繁っている。北方に行くほど、樹木はまばらになり、背も低くなる。巨大なツンドラ平原では、棒切れのような小さい木が生えているだけだ。

しかし森林地帯と無毛地帯とは、巨大な手と手をからませたように重なり合っている。森林の奥深くにツンドラ地帯が点在していたり、ツンドラの大平原の果てに樹木がオアシスのように繁っている、という具合だ。

ツンドラも、一種類だけではない。山の高い斜面には高山ツンドラ、タイガの周縁には灌木ツンドラ、北にはすげツンドラ、さらに北方になるとこけや地衣類のツンドラ、極北の島々には丘原ツンドラ、というように分けられる。丘原ツンドラでは、凍りついた北極の氷に囲まれたさい果ての島々にどうにか根をおろそうと、植物がはいつくばるようにして生えている。

夏になると、ツンドラ地帯は、いろいろな種類の花があたり一面に咲き乱れる。大体背は低いが、数限りなくあるので色とりどりの花が何百平方キロも埋めつくしてしまう。それがいわば小人国のジャングルのようになって、クモやマルハナバチ、小さくて優雅な蛾、それに蝶などが飛び回る。飛び回っているのはそれだけではなく、ぶゆや蚊も沢山いるが……。

鳥は大体どこでも何羽となく見られるし、いろいろな種類の哺乳類動物もいて、一帯を占拠している。ツンドラには、ずんぐり、でぶでぶのレミング（ねずみに似た動物）や毛むくじゃらのじゃこう牛、タイガには、ちっぽけなトガリネズミもおればでっかい大ジカもいる、というように多彩だ。

海は何種類かのクジラ、アザラシ、太ったセイウチ、図体の大きい白グマの住みかになっている。海も、内陸に無数にある湖水も、魚の宝庫だ。

北方は、見る目をもった人にとっては生き生きと、活力にあふれている。昔々、はるか時代をへだてた別の人種はこの真実を認識し、北方一帯を〝わが故郷（ホーム）〟と呼ぶようになった。（ファーリー・モーワット著「Canada North Now: The Great Betrayal」より引用。© 1976 by McClelland and Stewart Ltd.）

オオカミを見たい。そう思ったのは、レゾリュート・ベイにある航空会社の宿舎で、一枚のカラー写真を目にしてからである。

海に近い雪の平原を、一頭の白いオオカミが横切ろうとしている風景であった。あたりには、他に生き物の気配はない。枯れ枝が所々つき出ているだけの白い荒野を、オオカミはやや前かがみの姿勢で、海に向って進んでいるのだった。

北極の自然の中で、野生の姿のままのオオカミを、私はどうしても見たいと思った。三月中旬、日本人による初の北極点到達の試みを取材するため、カナダの果ての島、コーンウォーリス島（レゾリュートの所在地）に滞在していた時のことである。

それから一か月半が過ぎた五月はじめ、冷えきったDC3型機の機内に、サブザックをひっかけて私は乗りこんだ。北極点取材が終わり、レゾリュートに戻った直後である。エルズメア島中部のユーレカ測候所まで航空ガソリンを運ぶフライトに便乗させてもらったのだ。取材の現場では、ついに見ることのできなかった、生きたオオカミを、この機会に一目見たいという気持があった。

北緯八十度に位置するユーレカ測候所は、フィヨルドのそばの、広々とした台地に、しっかりしたつくりで、建てられていた。十二人の若い男たちが六か月交代で、単調だが厳しい観測作業を続けている。建物の中はシャツ一枚で過ごせる暖かさで、食堂も、個室も、考えていた以上に立派であった。測候所の近くに航空会社の事務所などいくつかの建物はあるが、夏を除いてまったく無人である。

コーヒーを飲みながら、観測員たちと語りあった後、私はひかえ目に切り出した。実は、もし可能ならオオカミを見たくてたまらないのだが……。

リックという名の二十八才のマネージャーが、二つ返事で案内を買って出てくれた。オオカミなら、ここいらには、いくらでもいる。ただ、たったいま、近く

氷点下42度のヘクラ岬に立つ江本氏。
イグルーの保温性の良さと堅牢さには感心した。

まで来ているかはわからないよ。まあ、行って見ましょう。

車を三分ほど走らせてから、リックは黙って指をさした。無人小屋のそばに、小さなものがいる。ウサギだった。車をおり、近づいても逃げない。意外に短かい両耳の先端部分に黒いブチがはいっており、足は日本の野ウサギより長い。追うと、二本足で立ったままの姿勢でピョコンと跳ぶ。

雪の上をさらに車で進むと、やがて道は行き止まりになり、大きなすり鉢状の窪地を見おろす場所に出た。夏には船がはいって来るフィヨルドが、窪地の向うに凍りついている。

リックが、私のひじをつついた。すぐ前方の岩が動いたように見えた。白いオオカミがゆっくりと窪地の底に向けて、おりようとしていた。一頭、ではない。うしろから、もう一頭、そして左手の台地から二頭。四頭の、小さな群なのだった。

外に出た私を、先頭のオオカミがうかがうように見上げた。白いフサフサとした毛。長い尾。一見、大型の犬と変わらないが、冷たい無表情な目が、どんな犬とも違っていた。

歩を速めはじめたオオカミを追って、私も窪地をおりる。こわいという気持は起きない。オオカミはふつう人間を襲わない、とレゾリュートで聞いていたせいもあったが、少しでも長くこの北極オオカミを観察していたいという気持が強かったのである。

しかし、表面だけがクラストした雪を踏み抜きながら、私の足は到底、四頭には及ばない。オオカミたちは時折、こちらを振り向きながら、次第に小さくなっていった。わずかな時間でも、それは私にとって貴重な出会いであった。

＊　＊

イエローナイフを飛び立ち、はじめて茫漠とした北極の氷原を見おろした時、私にはここに人間はもちろん、生き物が生存することさえ、信じ難いことに思えた。さんざんドキュメンタリー・フィルムや、写真で知っていたはずの世界ではあったが、実際に目のあたりにした冬の北極は、すべて白エナメルでぬりつぶされた、無機的な広がりとしかうつらなかったのである。南極と北極の重要な違いの一つは、人間が住むか否かにあるのだが、仮に北極圏に人の気配がないとしても、至極当然のようにこの時の私には思われた。

シロオオカミ。「Encyclopedia Canadiana, 1974」より。

しかし、暗夜に閉ざされた真冬も、その後に続く白夜の早春も、北極グマやオオカミ、じゃこう牛が餌を求めてさまようように、人間たちもまた、不断の生の営みを、繰り広げている。この地の人々にはごく当り前のその事実が、温帯から飛んで来た私を、感動させた。

もちろん、暮し向きには、数十年前までと比較にならない変化が起きている。ヒーターつきの小ぎれいな家に住み、スノー・スクーターを乗りまわすエスキモーの青年に、イグルーと犬ぞりの生活を期待するのは、すでに無礼と言うべきであろう。

しかし、それでも日々の生活条件の厳しさを思い知らされるのは、たとえばブリザードをついて百メートル離れた隣の家を訪ねる時である。氷点下四十度という気温の中で、町や村での日常的な行動は、それ自体しばしば〝冒険〟となり得る。猟期になって、家族ぐるみでアザラシやカリブー猟に出かける折には、一人一人が自然の中で生き抜く技術を要求されるだろう。

＊　＊

カナダ北部北極諸島の中心地、レゾリュート・ベイは、定期航空便と周辺諸島へのチャーター便基地として重要な新しい町である。ガソリンの匂いのするこの基地には約百五十人のエスキモーと、ほぼ同数の白人が住んでいるが、空港から五キロほど離れたエスキモー村に、リーバイという五十年配のエスキモーを訪ねたことがある。遠征に必要なアザラシ肉を手に入れたかったので、村きっての名ハンターである彼に、頼もうというわけであった。

心よく中に入れてくれたリーバイの家は、外はマイナス三十五度というのに、ヒーターでポカポカと暖かかった。アザラシ肉特有のむっとくるニオイがたちこめていたのは、ちょうど幼い娘さんが一人で食事をしていたからだ（ナイフを使って肉を切り取る器用な手つきに、感心させられた。）

リーバイは、氷が割れて海面が出たら、アザラシ撃ちに行ってやろうと言い、こちらはホッとした。十五頭ぐらいなら、一か月以内に獲れるというのである。

氷がなかなか割れないのか、天気が良くないためなのか、リーバイは実際には腰を上げようとはしなかった。翌日も翌日も、夕方になるとビールが飲める町で唯一の場所、ホテルのクラブに現れ、夫人と小ビンを楽しんでいる。私と顔を合わせると、ニヤッと笑い、グラスを上げる。そのうち、こちらもおかしくなって、彼の調子に合わせる結果になった。アザラシは別な場所から取り寄せ、リーバイとはビール友達になったのである。

リーバイは北極グマ、セイウチ、アザラシ、カリブーなど大型の動物のハンティングに、輝やかしい戦果を残している。春になると、いまでもスノー・スクーターにまたがり、ライフルを背負って、猟場へつっ走るが、昔ほど熱心でないのは、基地の仕事を手伝っているのと、政府からある程度の額の手当てをもらっているからだろう。

レゾリュートの近く。氷の下は海だ。
遠くに堀江さんの氷上ヨットがかすんで見える。

ただし、そのリーバイが毎年一度、確実に尊敬を集める行事がある。レゾリュートの町はずれに、カナダ空軍のサバイバル訓練所があり、リーバイはそこで若い軍人たちに、イグルーの作り方を教えているのだ。

イグルー。古い教科書に「エスキモーの家」というふうに紹介されていたこの丸い氷の家は、とうに過去のものとなった。イヌビックの町で、イグルーの写真を撮ろうと考えた日本人カメラマンは、二十年前に来い、とエスキモーに笑われたという。

しかし、イグルーそのものは、住居としてきわめて快適である。北緯八二度五三分、エルズメア島ヘクラ岬に設営した日大隊のベースキャンプで、私は三週間のイグルー生活を送り、その保温性の良さ、堅牢さに感嘆したのだ。エスキモーがわずか三時間で作ったイグルーは、ビニール布で四角い窓までつけられ、テントより明るく、暖かく、しかもどんな風にもビクともしなかった。このように優秀な家作りの腕を持つ人間を、私は文句なしにうらやましく思う。

＊　＊

ノースウェスト準州の首都イエローナイフに滞在中、年に一度のお祭り、「カリブー・カーニバル」にぶつかった。広場でのダンスや力くらべ、ミス・カーニバルの選出、凍ったグレート・スレーブ湖上の犬ぞりレースなど盛り沢山の行事が雪の中で繰り広げられたが、集まった人人の出身国籍の多彩さに、あらためておどろく。この広い国のすみずみに、いろいろな国の人たちが入りこんでおり、その一人一人がカナダ人なのだという事実に何ともなく感心しながら、犬ぞりレースのスタート地点に行くと、観客の中から声をかけられた。日本語である。

ビクトリア島南端のケンブリッジ・ベイに行く途中の街道憲久氏だった。カナダ北極圏の人間に魅かれて八年。三回目の長期滞在となる今回は、思いきって夫人と二人の幼い子をひき連れてやって来た。

「北極は、人が住んでいるからこそ好きなのです」と、二十九才の街道氏が言うのを聞きながら、思わず赤い頬をした三才と二才の兄妹の顔を見てしまう。確かに、一年間この子どもたちと共にする北極の村の生活は、大きな遠征隊のそれとは一味も二味も違うユニークな体験になるだろう。日本から家族ぐるみで、エスキモー村に入ろうとする発想が、ひどく新鮮に思われた。

その後、ケンブリッジ・ベイの友人宅に落ち着いた街道一家は、多くのエスキモー家族たちの助けで、北極圏の四季折々の生活を、楽しんでいるらしい。三才のダイスケも、二才のサチもエスキモーの子どもたちと一緒に組んずほぐれつの戦斗的な日々を送っているようだ。

二十年以上、国家的スケールの観測活動が続いている南極にくらべ、日本人にとって北極は縁の薄い所だと、私は思っていた。四百年以上に及ぶ北極探検史でも、日本人が顔を出すのは、例の白瀬中尉が南極以前に北極行を考えていたことぐらいである。

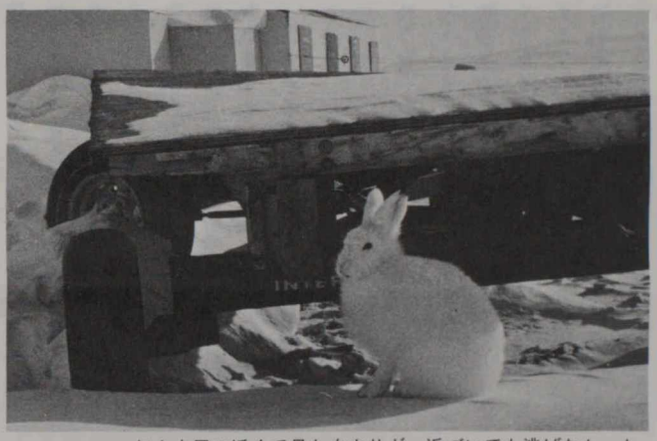
だが、街道さん一家の行動を見ると、北極圏がわれわれから隔絶された地域とキメつけるのは、いささか早まった考えのようである。アラスカを含め、日本人がこの北の地域に足を踏み入れた歴史は決して古くはないにしても、そこには南極行きにはない、生活の匂いというようなものがある。たとえば、北の人たちと暮しを共にしながら、われわれは獣の毛皮がどんなに必要であるかを、裏返して言えば温帯地域ではそんなものはいかに無用であるかを、理解することができる。エスキモーは、いまもスノー・スクーターを使ってアザラシやクマを追うが、北極で私が考えたことの一つは、人間とけものの共存ということであった。

この問題は、熱帯のアフリカでもすでに大きなテーマになっているが、一定の動物保護策の下で、北極ではよりオリジナルな形での狩りが、なお残っていると言えるだろう。アフリカのように、その狩りの何パーセントかはすでに異邦人の遊びに供されているとはいえ、人間とけものの関係の原点がここに存在する事実を、私は重視したい。

レゾリュートの三軒のエスキモーの家で、北極グマの毛皮が戸外に干してあるのを見た。航空機の最前線基地として開かれたこの新しい町の付近には、いまもクマが出没する。滑走路をノソノソ歩いていた、などという話が、まれにでなくあるのだ。

カナダ北極圏が、日本人を含む外国人観光客により門戸を広げるのは、時間の問題だろう。できるなら、ツーリストもまた、クマの危険におびえ続けるような、北極であってほしい、と私は願うのである。

（読売新聞記者）



無人小屋の近くで見た白ウサギ。近づいても逃げなかった。

エスキモー（イヌイット）

その歴史と暮らし

サッカーに興じるエスキモーの子どもたち。

「エスキモー」というのは、「生肉を食う人」の意味だそうである。アルゴンキン族のインディアンが、カナダ極地に住む人びとの一部族につけた名称だという。

エスキモー自身は、自分たちのことを〝イヌイット〟(Inuit)と呼ぶ。〝人間〟という意味だ。一面氷だけの極地では、人間といえば彼らしかいない。そこでアザラシや北極熊などと区別すべき存在として、自分たちのことをイヌイットと呼んだのであろう。

エスキモーが、氷河期にアジア大陸からベーリング海峡を渡ってきた、というのは定説になっている。今日のアラスカ沿岸に達したあと、だんだん東へ東へと移動したらしい。現在、エスキモーはソ連（シベリア）、アメリカ合衆国（アラスカ）、カナダ、デンマーク（グリーンランド）の四ヵ国にまたがって住んでいる。その数約十万人。そのうち、カナダには、北極海に面するユーコンおよびノースウェスト準州の沿岸、ケベック州北岸、北極海のビクトリア島やバフィン島などに、およそ二万二千人が住む。

エスキモーは、もともと、沿岸でアザラシ、セイウチ、魚、北極熊、鯨などを追って生活していた。これらの動物は、食糧だけでなく、燃料や衣服を彼らに与えてくれた。

エスキモーのある一群は、トナカイを追って内陸部へ入って行った。彼らはトナカイと湖水でとれる魚を食糧とし、鯨の脂肪の代わりに、たき木を燃料に使った。これらのエスキモーが海にでることは、ほとんどなかった。

やがて、十九世紀になって、捕鯨船がカナダの北極沿岸や、当時はエスキモーが住んでいたセント・ローレンス湾以北の大西洋沿岸に現れるようになる。十九世紀の末には、エスキモーは捕鯨船との物々交換を通じて、白人のもたらす品物や食糧にかなり依存するようになり、これまでの原始的な漂浪生活に変化が生じはじめる。

エスキモーは狩りがうまい。

またヨーロッパやアメリカ合衆国からやってきた捕鯨船が、数多くのエスキモーを雇い、エスキモーは木造の捕鯨船や銃砲、欧米の衣服、タバコなどに初めて接することになる。捕鯨船がエスキモーのいないところで操業する場合、夏の始めに何家族かのエスキモー（男も女も、そして子供たちも）を船に乗せて、秋には村に帰ってきた。越冬する場合は、船の中で暮らすか、近くの氷上で生活した。

エスキモーたちは、捕鯨船で働く代償として、肉などの食糧を支給された。男たちは、またライフルや弾薬、衣服、道具など、女たちは包丁や台所用品、針、マッチなどをもらった。男たちの中には、捕鯨船を手に入れたのもいた。

そのうち、鯨や北極熊の数は減り、エスキモーもヨーロッパ人から感染した病気で死ぬ者も多数でた。

やがて手皮商人がやってきて、エスキモーは自分たちが食糧、衣服、燃料に使った余りの毛皮や脂肪を、取引きするようになる。エスキモーの生活様式はさらに変化した。

第二次世界大戦と長距離航空機の開発は、エスキモーにさらに革命的な転機をもたらす。防衛施設に付随した滑走路が各地に作られ、気象台やレーダー通信網が設置されて、北極の孤立はやぶられた。

続いて、北極海周辺で天然資源の探査・開発が盛んになる。北極は一足飛びに二十世紀に突入した。

それとともに、エスキモーに対する一般の関心が高まり、政府も教育をはじめ、健康や生活の向上などに力を入れるようになる。

カナダ・エスキモーは、他のカナダ国民と全く変わらない権利を享受し、義務を負っている。選挙権、土地の所有権、税金納入の義務など、あらゆる意味で完全に市民としての地位を保障されている。

政府の政策は、エスキモーに対する機会均等をはかることであるが、多民族国家における一グループとして、エスキモー独特の伝統や文化の保持にも力を入れている。

エスキモーは、イグルーに住み、ハスキー犬の引くソリに乗り、あるいはカヤクをこいでアザラシやセイウチを追う、というイメージが強い。しかし、こういうイメージは過去のものだ。

今日のエスキモーは、スノーモビル（雪上車）を駆って走り、モーター・ボートで沖へ出、飛行機で旅をするし、通信衛星を通じてラジオを聴き、テレビをみるといった、きわめて近代的なくらしをしているのである。

北方の資源開発と環境

北方・インディアン省
北方パイプライン局
E・R・ワイック
L・C・N・バージェス
D・グリーンウッド

カナダ北方。南部十州の北、北緯六十度の北に位置する四百万平方キロのこの広大な陸地は、ユーコン・アラスカ境界線からバフィン島東岸まで三千キロ、北緯六十度線からエルズミア島の北端まで二千五百キロもある。ユーコン・アラスカ境界は、東京とバフィン島東南のフロビッシャー湾のほとんど中間にあたる。

カナダ北方の人口はおよそ六万。その三分の一は北西準州の首都イエローナイフとユーコン準州の首都ホワイトホースに、残り三分の二が大河の沿岸や海辺の村に、ちらばって住んでいる。

気候は大陸性で、マイナス六二度（摂氏）からプラス三六度まで上下する。霜が降りないのは七月と八月の二か月間だけ、と厳しい。雨量は、山の多いユーコン準州でさえ少ない。大体どこでも、年間千五百ミリも降る東京の四分の一以下だ。しかもその半分は雪である。

何百、何千とある湖のうち、グレート・ベア湖とグレート・スレーブ湖は、いずれも日本の瀬戸内海の二倍もある。北方の五ないし十パーセントは淡水だ。

ユーコン・アラスカ境界線から北極沿岸沿いに東側のおよそ北緯六十度にかけて、北方樹林帯の北辺をなす樹木線（ツリーライン）がのびる。そこでモミや樺、ポプラなどの木が、まばらに生えた背の低いエゾマツに代わる。その樹木線と北極海の間に、かん木やコケ以外には植物の生えていない広大なツンドラが横たわる。北極諸島をさらに北へ進むと、まるで砂漠のように植物が地表にはいつくばり、温かさと水分を求めて土壌に抱きついているかに見える。

近くなった北方

第二次世界大戦前にカナダ北方に行った人々は、生き抜くためにその地域の条件に合わせ、また多くの場合、インディアンやエスキモーの生活風習を取入れなければならなかった。当時、北部のより厳しい地域に行く人々は、命知らずとか、勇気ある探検家と見られていたものである。そういう人々は、どこか遠いインディアンやエスキモーの村で冬を過ごすか、海路でくると、安全な港で氷に閉じ込められることになった。ずっと前に建てられた設営地もあったが、南の補給地から遠く離れ、また冬の間はほとんど完全に孤立してしまった。

しかし、その後、交通網が発達し、北方のいろいろな地方へ手軽に行けるようになった。今、エドモントンやウィニペグ、モントリオールでジェット機に乗ってしまえば、北極圏の中に位置するイヌビック、ケンブリッジ・ベイ、レゾリュートなどに二、三時間で着いてしまう。エドモントンから車で行けば、二、三日でユーコン準州の首都ホワイトホースやノースウェスト準州の首都イエローナイフに達する。今年になって、ホワイトホースからイヌビックへも車で行けるようになった。

現在では、南部から北方へ、北方から南部へ、いろいろな方法で物資や人を輸送できる。主な輸送機関はすべて使われている。ただ、輸送費が高いため、今でもマッケンジー川や北極海沿岸に沿って、あるいはハドソン湾の中へ、氷の張らない夏の間だけ運航する水（海）上輸送に頼っているところが大きい。

膨大な地下資源

南に住むカナダ人の目で見ると、南北間の繋がりはかなり深まったようである。北方に眠っていると思われる膨大な天然資源のために、一帯はだんだんと世界経済の中に組み込まれるようになった。特に鉱業の歴史は古く、イエローナイフでは一九三〇年代の半ば以来、金鉱が掘られているし、北極圏の南二百五十キロ、マッケンジー川のノーマン・ウェルズでは、量は大したことはないが、一九二〇年代から石油が採取されている。

およそ十五年前から、鉱業と石油・天然ガスが重要性を増してきた。一九六四年にユーコン、ノースウェスト両準州における鉱業生産額は三千三百万ドルであったのが、一九七七年には四億六千万ドルに達した。石油・天然ガスの探掘にかける年間費用も、一九六六年の二千七百五十万ドルから、一九七七年には三億一千ドルに増加した。

石油・天然ガスの開発は膨大な規模に達し、北方に住むすべての人々に何らかの形で影響を与えることになった。大きな油井やガス田が発見され、大量の大型パイプラインの可能性が検討された。北方の村は、産業化の波に乗って、短期間のうちにその人口が二倍、三倍にふえたところもある。

国民総生産とか国際収支の観点からすると、これはいいことである。しかし、社会的、環境的な意味では、対価はかなり高くついたといえる。問題点をいくつか見てみよう。

開発の社会的影響

北方開発の社会的影響を検討する場合、産業や政府活動の拡大に伴なって北方にやってきた人々と、北方を故郷とする人々、すなわちインディアンやメティス（インディアンと白人の混血、正確にはフランス系白人とインディアンの混血）とを区別する必要がある。北方にやってきた

イヌビックの夜明け。ここにも近代的な住宅が建ち並んでいる。

北方から石油を運ぶパイプライン。
経済的・社会的影響が大きく論議された。

外部の人々は、過去二、三十年の間、この地域に大きな影響を与えてきた。このことは、特に産業および政府活動が活発化した最近になって著しい。これらの人々は産業や政府活動の先頭に立って、新しい町の建設、道路の延長、天然資源の探査・開発といったフロンティア地域の発展と膨大な未開発地域の馴化・管理（と大方のカナダが考えるもの）に尽してきた。カナダ南部の人々が北方に移り、そこで数年間くらすとなれば、当然ながら、それまで住んでいた町や都市の社会環境をまねて作ろうとする。そこで、イエローナイフ、ホワイトホース、ヘイ・リバー、イヌビックといった北方の近代的な町は、大体、南部カナダの小さな町に似ている。

しかし、そうした町でも、南方と北方の違いは表面的だ。北方の町は、ときとして、何かまだ落ち着かない、浮わついた感じがする。北方の町は、ほとんどのカナダ人にとって、いまだに人間にとって住みにくいところで、そこに住むとやはりいろいろな身体的、精神的苦痛を伴なう。冬は極端に長く、また時としてもものすごく寒い。しかもほとんどずっと暗い。冬になると、よそからきた人々は、わが家からどんなに離れて暮しているかを改めて痛感する。

とはいえ、カナダの南部から北方に移り住み、そこで働くようになった人々は、厳しい気候に大体適合している。タウンハウスを建てたり、家族をつれて移住するのは不可能だが、北極諸島の探査現場で働く作業員の交代を定期的にやるなど、ほかの方法をうまく講じている。開発地域がさらに遠く、また気候的にも厳しい地域に移るにつれて、こうした解決法がもっと使われることになるだろう。

インディアン、エスキモーと開発

北方を故郷とする人々、すなわちインディアンやイヌイット（エスキモー）は、産業の発展により何を得ただろうか。確かに雇用の機会はふえた。しかし、彼らの近代産業への適応はじゅうぶんとは言えない。文化的にも、社会的にも、経済的にも、先住民族は今でも猟師であり、わな師であり、漁師である。会社の従業員や政府の役人になりきった人は少ない。

しかも、環境の変化は先住民族にとって、往々にして破壊的であった。彼らは強い伝統をもちながら、自分で進んでというよりは、必要に迫られて、先祖代々の生活様式を捨て、北方にある町へ移動した。そこで彼らは古い生活様式を続けることも、新しい状況になじむこともできず、疎外され、社会の隅で暮らすようになった。

しかし、それぞれの村や町では、状況の変化にうまく適応した人々や家族もある。自分たちの土地に対する権利を主張するためにつくったいろいろな団体を通じて、あるいは北西準州議会などの組織を通じて、彼らは北方の将来を決める上で重要な貢献をしている。連邦議会における北西準州の選出議員、ワリー・ファース氏は、先住民である。

先住民族が将来に対して特に憂慮しているのは、土地に関することである。広い地域で狩りや漁、あるいはワナをしかけるのは、インディアンやエスキモーにとって文化的基盤そのものであるが、近年になって、産業活動の増大や南からやってくる人々の増加により、自由に土地を利用することがむつかしくなった。問題は、彼らがどういうふうに、またどのていどの規模で土地を利用するかということが、南に住む人々に分っていないところに、一部起因している。政府がこのような問題に気付いた場合は、時間をかけて大規模な調査を行うなど、解決にあらゆる努力を払ってきた。

それでも、インディアンやエスキモーは、自分たちの土地に対する権利を失うのを恐れて、要求を文書化することになった。交渉による解決を望む政府は、こうした作業を支援している。現在、いくつかの土地に対する要求書がまとめられつつある。すぐに解決されるのもあろうが、相当の時間をかけないと解決できそうもないのもある。

開発と環境

北方における環境上の影響については、石油の探査や開発、鉱業、道路建設などに焦点を当てて論じることができようが、ここでは石油開発、中でもパイプラインを例にとって考えてみよう。

一九六八年、アラスカのノース・スロープで大規模な炭化水素の埋蔵資源が発見され、カナダ政府と国民は初めて北方の環境と大々的な開発がもたらすと思われる環境上の影響に目を向けた。カナダの北極海でも同様の発見がなされる可能性は強い。石油の探査費としてあげられている金額の大きさは、この楽観性を反映している。ノース・スロープで炭化水素が発見されるまで、大規模な石油開発（どんな開発でもいいが）の環境に対する影響については、ほとんど関心が払われなかった。例え〝環境〟が意識的に考慮されることがあっても、むしろ開発を阻害するものという観点からとらえられていた。

環境は、事実、開発を遅らせたし、現在もそれはかわらない。人は、いろいろな場所、開発の技術や遠距離によって必要とされる日程、地勢、季節、極寒などに合わせていかなければならない。立地やそこまでの輸送路の建設といった土木工事には、複雑な地勢という問題のほかに、永久凍土層（年中凍結していて、夏の間だけ地表から数センチないし二、三メートルぐらい氷がとける土地）というやっかいな問題もある。個人や企業の活動の時期は、季節と密接に結びついている。地元のワナ師であれ、あるいは大企業の外勤チームであれ、冬の間は、風と寒さと何週間も続く暗さのために、外での仕事は非常に困難だ。夏は夏で、地表の氷がとけ、またとけだした北極海から霧がたち込めて、交通問題をはじめ、いろいろな問題が起こる。北方の資源開発には、補給、土地、不変の環境条件といっ

た高い対価を支払わなければならない。

高まる環境への関心

一九七〇年に入って、北方の自然環境は産業開発に高くつくということだけでなく、北方や北方住民にあわない資源開発をすれば、環境自体も高い対価を払うことになる、という認識が、いくつかのことが要因になってでてきた。要因というのは、例えば北方に対する関心が高まったこと、申請されている開発プロジェクトの規模に対する認識、一九六六年における汚染問題や環境会議によって強まった環境への理解、一九七二年のストックホルムにおける国連人間環境問題会議に結びついた環境問題に対する世界的関心の高まり、などである。

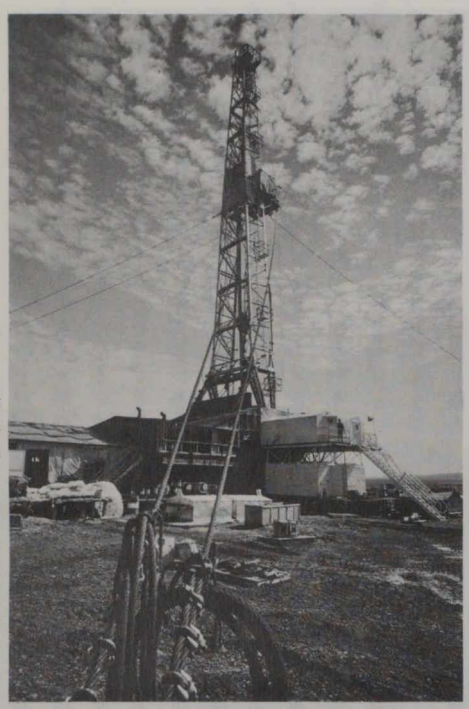
環境に対する関心が増大したことと、パイプライン敷設計画の規模がいかにも大きいため、連邦政府は環境問題を含む調査を開始した。同時に、政府は石油産業に対し、パイプライン関係の調査研究やパイプライン建設の正式な申請書の中で、環境および社会に及ぼす影響についても触れるよう、パイプライン建設に関するガイドラインを発表した。

石油産業および政府による研究調査(費用はそれぞれ五千万ドルと千五百万ドル)、バージャー調査(ブリティッシュ・コロンビア州のバージャー判事が連邦政府の依頼で行った調査)、その他の調査により、いくつかのパイプライン建設計画の環境に及ぼす影響を調べ上げた。これらの調査の結果、北方における資源開発を評価する場合の生態的基準が確立された。

これは、今日の自然科学上の知識によって、諸建設プロジェクトがじゅうぶん評価、査定できるということではない。自然界のことは、まだよく分っていない部分もある。たとえば、北極の生態系における単純な食物連鎖は、一般的なことだけしか解明されていない。これらの食物連鎖は、インディアンやイヌイットの伝統的経済生活にとって欠かせない大鹿、水鳥、それに海生哺乳動物を支えている、にもかかわらずである。しかも、これらの動物は、カナダの国家的財産であるとともに、国際的にも共同で責任を負っている、にもかかわらずである。

いろいろな種類の動物やいくつかの自然現象については、人間によってもたらされた変化が長期的にどういう結果を及ぼすか、理解どころか、よく知られてもいない。自然破壊が大鹿の移動や水鳥による航空機妨害、あるいは霜の隆起現象などに及ぼす影響が、その例である。

北方の資源開発を生態系の面から評価するには、最近なされた研究調査の二つの主要成果が基礎になる。第一は、すべての生物システムに当てはまる生態上の幅広い原則を北方の生態系に適用することで、これによって最低限のデータ・ベースが得られたほか、既知のことがらと未知のことがらとの選別ができた。第二は、生態系と土木工事計画における主要な要素と過程および両者の関係を明確にしたことである。


北西準州ブローにある石油掘削装置。

基本的問題

資源開発の生態的側面を考える上で、最も基本的な問題は何だろうか。

土木工事とか産業プロジェクト、あるいは経済開発政策などが長期的にどういう意味合いをもっているかは、最初の時点ではなかなか完全に見通せるものではない。パイプライン建設に関するガイドラインによって、回廊計画(ガスおよび石油パイプラインを大規模の炭化水素開発地点からひくという計画)による環境に対する影響がどうつみ重なっていくか、ということが調査されることになった。何十億ドルもするパイプライン建設は、開発の出発点であって、最終地点ではないという認識の上に立ってはじめて、その影響の本当の大きさを知り、対応策を考えることができる。

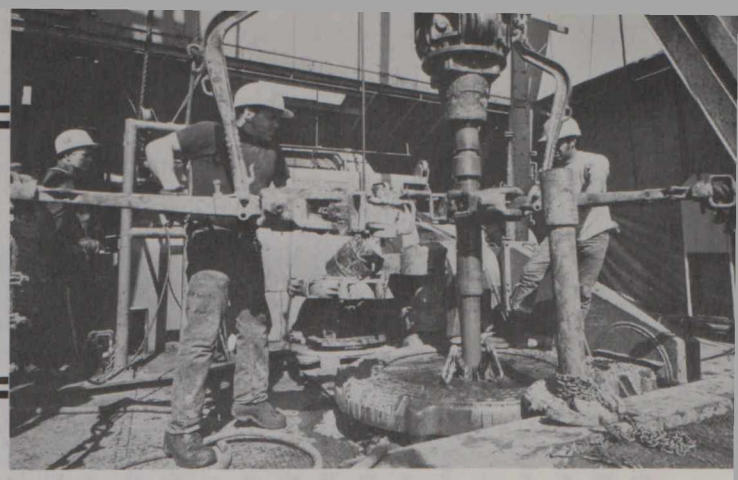
夏の北極海は、何百万という水鳥や海鳥、海岸に住む鳥などの渡り鳥がやってきて、短い期間に巣を作り、ひなを育て、南へ帰るだけの力をつける。それを妨害したり遅らせたりすれば、群体すべての存在を危うくすることになりかねない。回游魚もそういう変化に弱い。そうなると、七月にマッケンジー・デルタで子を生むシロクジラも危なくなる。

野生動物の弱さは、それぞれの生長過程と関係するだけでなく、これらの種族がある一定の時期に集中する場所とも関係する。原因は、一度にある特定の場所に寄り集まるところにある。しかし、大鹿やクジラが子を産み、鳥が巣を作り、あるいは魚が川の氷の下で冬を過ごせるだけの場所が十分ないことも原因である。

動物によっては、人間の活動がもとで、あるいは自然界でしか生きられないために、すでにかなり数が減ったのもある。このほど、北方における国立公園予定地として、六つの地域が指定されたが、これは大自然の中でしか生きられないある種の鳥や動物を保護するための政策の一環としてなされたものである。

以上述べたように、近年におけるエネルギー危機に対する認識と相まって、カナダ国民は北方開発に大きな関心を寄せてきた。北方開発と深く結びついている環境的および社会的要因に対する理解が高まったことは、技術の利用と不変の環境あるいは伝統的価値観とは矛盾しないという、開発に対する新しい発想が生まれてきたといえるかもしれない。これにより、北方の環境は開発に高い対価を要求せず、またそれ自体もそれだけの対価を払わなくてもすみそうである。また、そこに住むインディアンやエスキモーも、満足できる社会を築くだけの時間と資源を手にする、ということになろう。

石油・天然ガスの開発



過去十年間におけるエネルギー実質コストの大幅上昇により、カナダを含む先進工業諸国は現実に合ったエネルギー政策への転換を迫られた。カナダ政府が選んだ政策は、供給増加と節約によるエネルギーの自給作戦を展開することであった。

エネルギー供給を増加するために政府が特に力を入れたのは、妥当な社会的、環境的条件のもので、北方地域におけるエネルギー資源の探査・開発を、促進することである。この目的に沿って、政府は当初認可資本五億ドルというカナダ石油公社（ペトロ・カナダ）を設立した。北方の採掘有望な地域で探査・開発事業を推進するためである。

加えて、エネルギーの効率を高め、かつ石油および天然ガスの国内供給を促進する措置がとられた。具体的には、政府管理による石油・天然ガスの価格引上げ、国内石油の利用拡大、開発促進のための財政的刺激の導入などが上げられる。

一九七七年末までに、マッケンジー・デルタにおける資源探査に投入された金額は約三億ドル。ボーフォート海と北極海地域における掘削費は、それぞれ累積四億ドルにのぼる。マッケンジー・デルタや北極海諸島では、陸上掘削が一九六二年以来、成功裡に進められているが、北極海沿岸での作業は、一九七三年まで地質や環境に関するデータの収集に限られていた。

人工島から試掘

業界では、掘削作業を沿岸地域まで拡大するため、マッケンジー・デルタのトゥク半島沖の浅い（五メートル以下）地域に的をしぼった。この一帯は、すでに陸上で発見された炭化水素含有層とつながっていると見られたからである。

沿岸での試し掘りは、一九七三年の夏、インペリアル石油会社によって初めて行われた。まず、近くから浚渫された泥、砂、砂利などで、直径百三十五メートル、円錐台状の人工島が水深四メートルのところに作られた。土砂を運び込み、そのまま沈滞させて、海面上四メートルの高さまで積み上げた。勾配になった島の周囲は金網、防水帆布、砂袋などで、波や氷による侵食から守るようにした。

島の一番高い中心部は平らにして、冬の掘削期が始まるまで、氷結したままにしておいた。やがて掘削シーズンが始まると、通常の陸上用掘削機を氷で作った道路を通じて運んで設置した。こうして、この人工島から四ヵ月にわたって無事、掘削が行われた。

その後、インペリアル石油会社は、水深約三メートルの人工島を冬の間に建設して、ボーフォート海での探鉱作業を続けた。同社はまず一帯の氷を切って、水面を出し、陸上にある近くの採掘場からトラックで土砂を運んで、五十一日間で横百二十メートル、縦六十メートル、高さ三メートルの角柱状の島を作り上げた。

同社はその技術をさらに発展させ、水深十二メートル以上のところでも人工島が建設できるようになった。水深四メートルの最初の人工島は、建設費が七百八十万ドルかかり、二十二万平方メートルもの土砂を要した。現在、人工島を建設するには、水深一メートルにつきおよそ百二十四万ドルで足りる。

このような海底試掘の結果、これまでに石油・天然ガスが七回も発見されている。

次に北方沿岸の海底で探鉱を試みたのは、パン・アークティック・オイル社。パン・アークティック・オイル社では、一九六九年から七二年にかけてメルビル島サビン半島の東側と西側で発見されたドレークおよびヘクラ両天然ガス田の規模を探るため、水深五十ないし百五十メートルのところで、氷上に設けた通常の陸上用掘削機を用いて、沖合十六キロのところまで掘ってみようという計画であった。北極海諸島にはさまれた沿岸地帯は、一年のうち八ヵ月は氷結しており、しかも特にサビン半島沖では地勢の影響で氷がほとんど移動しない。

そこで、氷面に何度も水をまいて厚さ三メートルぐらいに強化した氷で掘削台（プラットフォーム）を作ることが提案された。この氷結作業は秋の末に始められ、初冬に終わった。海底に高圧式密閉型海洋ラム（落しづち）を設置して、地上で通常通りの運転を行い、地上の荷重によって起こる環境的状況の変化、氷の移動、氷の強さなどを適当な装置で測定した。

このシステムはうまくいき、一九七四年の一月から四月にかけて最初の油井が試掘された。これまでに、水深二百七十五メートル級のものを含め、九つの油井が掘られている。これらの試掘により、ヘクラおよびドレーク両天然ガス田の輪郭がはっきりした。その結果さらに、それぞれの天然ガス田は沿岸に十八キロおよび八キロも広く設定された。この掘削方法を使って、北極諸島の別の沿岸地域で、新たに二つの天然ガス・油田が発見されている。

もうひとつの沿岸掘削システムを開発したのはドーム・ペトロリウム社。風、潮流、叢氷（浮氷が集まって凍りついた氷塊）などのため、これまでのシステムが使えないボーフォート海の深い地域で探鉱するためのものである。水深二十五メートルから百メートルに達するボーフォート海のこの一帯で、ドーム・ペトロリウム社は、係留装置を備えた掘削船を、氷の張らない時期（例年七月から九月まで）に操作することにした。カナダ海運規則にしたがって船体を氷で補強した掘削船が、三隻建造された。

掘削中に掘削船近くに寄ってくることが予想される浮氷を割って片づけるため、

北極海で進む

ボーフォート海にあるインペリアル・オイル社の油井「クグマリトH-59号」

四隻の二級砕氷ボートの力を借りることにした。

これらの船は、一九七六年の夏、無事ボーフォートに着き、ドーム社は他の二社と共に二夏の間、一帯で試掘した。その結果、三件の大きな炭化水素層が発見された。

この三番目の試掘システムは、最もコストが高いが、ドーム社としては掘削期間を二倍に延ばして掘削作業の単価を大幅に引下げるため、X級の砕氷船一隻を追加できないかどうか、検討中である。

ガス井の掘削に成功

カナダ石油公社が株の四十五パーセントを所有しているパン・アークティック・オイル社では、一九七七年の末から七八年の始めにかけて、北極海の氷原下における世界初の沿岸天然ガス井を掘ることに成功した。パン・アークティック・オイル社ドレークF—七六開発井と指定されたこのガス井の完成に伴ない、同社はある実験計画の許可を連邦政府に申請した。これは海面下に、順次水力制御システムによって陸上から制御する、潜水夫を使わない〝クリスマス・ツリー〟（自噴井の抗口に取りつける、流量調整装置。形がクリスマス・ツリーに似ている）を設置し、水深五十八メートルにガス井を掘ってスイート・ガス（低硫黄天然ガス）を採取しようというものであった。陸上に設置された施設を試験するために、ガス井から長さ千二百二十メートルのフローライン（抗井と集油所を結ぶパイプライン）も通すことになっていた。

フローラインは直径四百五十七ミリの流送パイプで、中にはそれぞれ十MPa（パスカル）の抗井圧で一日当り最大百七十万立方メートルの天然ガスが流送できる百六十八ミリのパイプラインが二本入っていた。

氷上に設置されたウインチ（巻揚げ機）で沿岸からパイプライン敷設用すきを引っぱって、水深二十メートルのところまで深さ一・四メートルの溝が掘られた。パイプラインを氷による害からさらに保護するため、岸辺に冷凍システムを設置し、前部汀（満潮線と干潮線の間にある海岸地帯）にもくり返し表面に水をかけて地表の氷を底まで凍結させた。

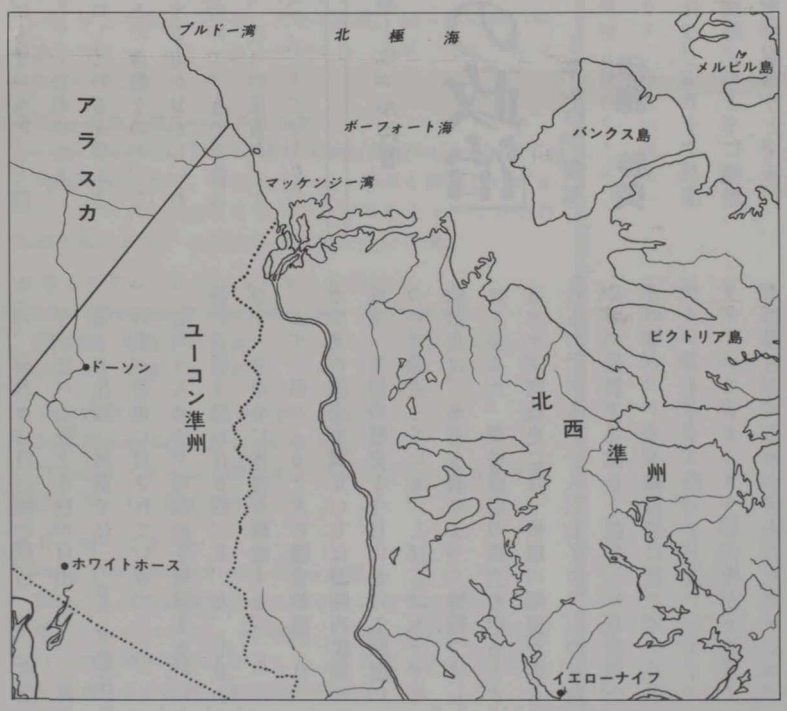
フローラインの水和管理は、主にライン環にメタノールを注入するか、抗井地点でフローラインに直接注入する方法によった。この方法を補完するため、フローラインはひとつひとつ熱追跡処理がされた。フローラインのひとつが注入装置の故障か、水和形成限度の調査の一環として水和がかなり増大した場合、二番目のフローラインに移送できるようにする。そこで密閉フローラインを熱追跡システムによって熱し、水和物を除去する。

このシステムの魅力は、電力のロスが少ないことで、したがってひとつのコントロール・ステーションから、より長くて、またより太いフローラインが使用できるというところにある。

以上のことからお分りのように、カナダの石油および天然ガスを採取する方法は、基本的技術を含め、すでにでき上っている。カナダ石油公社、アルバータ・ガス・トランクライン社、それに五つの海上輸送会社からなるコンソーシアムでは、二隻の砕氷TNGタンカーで、メルビル島から大西洋沿岸一帯へ一日当り平均七百立方メートルの天然ガスを輸送できないかどうか、検討している。

またトランス・カナダ・パイプライン社が中心になっている北極ガス開発グループでは外側直径千六十七ミリ、長さ三千七百六十五キロのパイプライン（うち百四十三キロは海中）を北極に建設する申請をしている。さらに、マッケンジー・デルタとアルバータ・ハイウェー・パイプラインを結ぶデムスター・バイパス・パイプラインも、一九八〇年代の中頃には完成の予定である。

カナダ北方は、今、活動期を迎えた、といえよう。



「ヌナーガ エスキモーと共に十年」

ダンカン・ブライド著
平凡社刊

五月女 次男

カナダ建国より長い歴史をもっているハドソン湾会社は、今はザ・ベイという百貨店やスーパーとして続いている。ところでこのハドソン湾会社の社員は、むかしも、そして現在も、スコットランド出身者が多い。どうもスコットランド人が忍耐強く、極寒の地に暮すことに慣れているからしい。きびしい環境でエスキモーやインディアンを相手にした商売を続けてきたハドソン湾会社の人々というものは、まことに偉いものであった。

「ヌナーガ」の作者ダンカン・ブライドもまた、スコットランドからカナダ北極にやってきて、ハドソン湾会社で働いた。この本は、彼がそこで見聞したエスキモーのリアルな生活を克明に記述したもので、なかなか面白く読めた。

アラスカとカナダのエスキモーは、過去十五年の間に大きく変わり、現在ではバフィン島の最北端に行っても、犬ゾリなどは見られなくなってしまった。ダンカン・ブライドの「ヌナーガ」は、したがって、消滅してしまったエスキモーの狩りや生活を記録した最後の本ということになり、その意味では貴重な記録である。

樹木はまるでなく、夏の間にほんのわずかに咲く極北の花以外に緑はない。まるで砂漠のような場所に、エスキモーは一万年以上も歴史をもっていたという驚き。その秘密がこの本からよく分る。エスキモーの生活の知恵のすばらしさ、きびしい自然環境にうまくとけ込む技術、そして生存の方法をこの本から学びとることが出来る。

ダンカン・ブライドは白人である。白人である作者がどのようにしてエスキモーの信頼を得ていくか。これはたびたび極北に出かけエスキモーに接する私などには、おおいに勉強になった。

彼の描いているエスキモーの世界は、今や夢のまた夢となってしまった。酒が入ってきて、人々は怠惰になった。石油開発で仕事はいくらもある。収入も良くなった。狩りのような不安な生活をしなくてもすむようになった。しかし、これでエスキモーは幸福になったとは思わないのである。

生活が安定して、暖かい家にじっとしていられても、彼らの血は極寒の氷原に獲物を求めてさまよい歩くことを忘れない。これこそがエスキモーの血なのだから。しかし長い時間のあとには、エスキモーも完全にヨーロッパ的な社会に適合してしまうだろう。

だがそうなっても、極北カナダのきびしい自然は今と変わらない。ダンカン・ブライドはそういったエスキモーの未来をも見通しているようだ。ただし、エスキモーの同化はゆっくりがよい。グリーンランドのように。カナダでも、最近は犬ゾリを再び使おうというエスキモーが増えてきている。

スノーモビルより犬ゾリの方が、極北の自然に適っている。そのことにエスキモー自身が気づいたというのは喜ばしい。

カナダ人の九十九パーセントは北極カナダに行ったことがない。従って殆んど知らない。レゾリュートといっても、分ってくれるのは珍しい。カナダ人にとって、極北は人間の住むところではない。そういう場所で働く人に、北極手当がでるのを見ても分る。

しかし、住めそうにもない所に、人間は二万年も前から暮していたのである。エスキモーと行を共にしていると学ぶことが多いのは、まことに当然なのだ。こんなことに驚いたりする方がおかしいのである。私自身をも含めて、もっと彼らの知恵を学びとって、我々の反省のよすがとしたい。（エクスペディション・サービス）

「カナダの政治」

J・リッカー、J・セーウェル共著
馬場伸也 他訳
ミネルヴァ書房

伊藤 勝美

本書は、著者によれば、「カナダが依って立つ政治機構は実際どのように機能しているかを読者に理解願おうとする」ことを目的とし、「問題点に対する解答を与えるというよりは、むしろ、カナダの政治に対して新たな問いかけ」をなすことに重点を置いて書かれたものである。二名の著名なカナダの学者、J・リッカー（歴史家・教育者）とJ・セーウェル（政治学者）による本書は、カナダの政治、ひいては西欧デモクラシーの理解のために、簡にして要を得た概論的な入門書であるといえよう。

本書の構成は、次の十一の章からなっている。

一、序言（カナダの政治形態）二、民主制度の機能　三、政党　四、カナダの議会制度　五、議会と新聞　六、オタワと州　七、ケベックとカナダ八、州および自治体の政治　九、官僚十、法の支配と市民の自由　十一、英米との比較（邦訳では、「カナダ憲法」抄出が巻末に付されている）。

右のうちカナダの政治を理解するのに特に重要と思われる四、五、六、七および十一を中心に本書を概観する。

まず、四の「カナダの議会制度」は、カナダの議会主義ないしは議院内閣制の成立・発展の歴史と今日における問題について論述している。しばしばカナダの政治史は、漸進主義によって特徴づけられているが、責任政府の成立を中心とするカナダ憲政史には、飛躍の契機がみられるのである。一八三七年の二つの反乱にまで発展する議会と総督・行政評議会との争い、ダラム報告書に続くボールドウィン（イギリス系カナダ人）とルイ・ラフォンテーヌ（フランス系カナダ人）を指導者とするカナダ人のたたかいが、責任政府の実現をもたらしたのであった。著者はこの過程を簡潔に叙述している。現代のカナダの議院内閣制が直面している問題として、下院の地位の低下、上院のあり方とその改革の必要性、政府の情報独占による国民と政府との間の溝の深まりなどが指摘されているが、日本にも共通するものが含まれており、大いに興味をおぼえる。

次に、五の「議会と新聞」であるが、著者はマス・メディアが「政治過程のまさに必要不可欠な部分」であるとし、これに関する研究の必要を説いている。とくに新聞報道と党派性についての指摘は注目に値しよう。新聞社の見解は見解であることを明示しつつ、ニュースの選

択と報道は客観的かつ公平にすべきであると論じ、電波メディアについても同様のことがいえると述べている。さらに、新聞所有権の集中化と新聞によるラジオ局・テレビ局の支配の増大化傾向にたいする国民の懸念について言及している。

六の「オタワと州」ならびに七の「ケベックとカナダ」は、「統治しにくい国家」としてのカナダが直面しつつある深刻な政治問題、すなわち、「地域主義」（とくにカナダ西部のそれ）に基づく「忠誠の分裂」（E・R・ブラック）の拡大と、ケベックの分離主義の台頭を原因とするカナダ連邦制の危機を理解するために重要な章である。

邦訳五ページの漫画（本書の各所には、ユーモアと風刺のきいた漫画が掲載されている）と、その解説のために引用されたトルドー首相の言葉――「連邦制とはなんとバランスをとるのがむつかしいことか」――は、端的に右の深刻な政治問題を表現しているといえよう。この漫画は、サーカスの綱渡りの綱のうえで各地域・各州が勝手な〝演技〟をし、トルドーが綱の中央で苦闘している様を描いているが、とくに綱からおりようとするケベックを、トルドーが必死にこれをつかんでそうさせまいとし（これはカナダの統一を確保しようとする努力のことを意味する）、一方、疎外感を強めつつある平原諸州（アルバータ、サスカチュワンおよびマニトバの三州）が、彼の尻を農業用のフォークで突いている様子は、カナダ政治の困難な局面をきわめて象徴的に描写している。本年、連邦政府は、英仏両語の同等性の保障、地域較差の解消、国民の意思と合意に基づく政治等……などをめざす憲法改正案を議会に提出したが、六と七の章は、この改正案の背景やケベックのレファレンダム（州民投票）問題等を知る良き手引きとなるであろう。

終章の「英米との比較」は、行政府、立法府、連邦主義、市民的自由の四つの項目について、カナダ、イギリス、アメリカのあいだにみられる主要な類似点と相違点について記述されている。このような比較は、カナダの政治制度の一層の把握に役立つものと考えられる。

ところで、カナダにとって、米加関係は通常の二国間関係以上のものであって、この関係が経済的、文化的のみならず政治的にもカナダにおよぼしているインパクトは、はかりしれないものがある。この点からも、米加関係についてある程度の記述が必要であるように思われる。さらに、ニュー・フランス時代以来のカナダのネーション・ビルディングの歴史について、一の序言などにおいて言及されていればよかったのではないか。そうすれば、読者（とくに日本人の読者）にとって、フランス系カナダとイギリス系カナダの対立の背景、カナダの政治制度における植民地時代の遺物の存在などについて、理解が一層容易になるのではなかろうか。

邦訳についていえば、訳語に今少し配慮が必要であったと思われる箇所がないでもない。例えば、「立憲機構」（五〇ページ、五一ページ、一一三ページなど）を「憲法」または「統治機構」に、「一元的国家」（一九九ページ）を「単一国家」に訳したほうがよいのではないか。なお、「英国立憲制体」（六二ページ）は「英国立憲政体」のミスであり、「行動の自由」（一七四ページ）は、「移動の自由」のミスであろう。

ともあれ、カナダの政治についての基本的入門書である本書の邦訳が刊行されたことにより、訳者の言葉にしたがっていえば、日本において「カナダへの高まりつつある関心とその国に対する情報不足との間の落差」が埋められ、日本のカナダ研究が一層前進することは疑いのないところである。

（近畿大学助教授）

カナダ北方に関する12冊の本

つい10年ほど前まで、カナダ北方に対する一般の人々の関心は低く、本もピエール・バートンの「クロンダイク」、R.A.J.フィリップスの「カナダの北方」、ファーリー・モーワットの「カナダ北方－1967年」など、2、3を数えるにすぎなかった。ところが、最近は北方に住むインディアンやエスキモー（イヌイット）、生態系、天然資源などへの関心が高まり、いろいろな本が刊行されている。そのうち、読者に興味のありそうな12冊の本を紹介しよう。

● ファーリー・モーワット
Canada North Now (McClelland & Stewart)
自著「1967 Canada North」の改訂版。北方に関する神話をうちくだき、インディアンやエスキモーに対する白人の措置を告発する。本紙3ページを参照。

● エドガー・J・ドスマン
The National Interest; The Politics of Northern Development 1968-75 (McClelland & Stewart)
北方が直面する諸問題を客観的に分析している。

● フィン・シュルツ・ローレンチェン
Arctic (McClelland & Stewart)
北方住民に対する政府の抑圧的政策を非難した本。

● ジョン・フォスター、ジャネット・フォスター
To the Wild Country (Van Nostrand Reinhold)
同じ題名で放送されたCBCテレビの連続番組の作者による、北方紹介の写真版。

● スーザン・コーワン編
We Don't Live in Snow Houses Now
アークティック・ベイに住む人々とのインタビューの記録。

● ウィニフレッド・ペッチリー・マーシュ
People of the Willow (Oxford University Press)
パドリミュイト族エスキモーを描いた絵のコレクション。

● W・A・ケニオン
Tokens of Possession: The Northern Voyages of Martin Frobisher (Royal Ontario Museum)
フロビッシャーの航海を、ケニオン自身の経験を踏まえて、歴史的に解説したもの。

● ウィリアム・R・ハント
A.R.C.T.I.C. Passage (Charles Scribner's Sons)
ベーリング海近辺に住む人々の物語。彼らが初期の探検家たちから、いかに非人間的な扱いを受けたかが紹介されている。

● ジョイス・C・バークハウス
George Dawson, The Little Giant (Clarke, Irwin & Co)
1800年代の末に、今日のユーコン準州を探検したジョージ・ドーソン（彼にちなんでつけられたドーソン市の名前で知られる）に関する少年少女むけの書。

● ウィリアム・レアード・マッキンリー
Karluk (George Weidenfeld and Nicholson)
60年前、不運な目にあった「カールック号」で起ったことについて書いたもの。

● ウィリアム・D・ブランケンシップ
Yukon Gold (Clarke, Irwin & Co.)
ゴールド・ラッシュ時代のドーソン市におけるある警察官についての面白い小説。

● C・W・ニコール
Tikkisi (McClelland and Stewart)
事故がもとで記憶喪失症にかかり、イヌイット（エスキモー）にシャーマン（呪術師）と思い込まれている若い白人の動物学者の目を通して、白人とイヌイットの現実を交差させた小説。著者20年の労作。

カナダの生活の中から

河村　総子

日本からカナダという異文化の中に投げ出された私にとって、最初のカルチャー・ショックは、「女性がちがう」ということだった。私は、異質の社会の人々と接して、特に、女性の態度と社会的存在としての扱われ方が、日本とは随分ちがうように思った。この事実は、以前に日本へ来たことのあるカナダ人の友人が、「日本で何を強く感じましたか」という私の問いに、「日本の女性」と答えたことからも言えると思う。

何もかも珍しく感じられた最初の頃、私は何組かの夫婦の集まる夕食の席で、夫人たちが実に堂々と振るまい、はっきりと意見を述べながら会話をすすめていく姿に接し、日本の女性との違いを強く印象づけられたのだった。また、買い物の折りに経験する女店員の態度、銀行の窓口の女性などのきっぱりした対応に、圧倒されそうな気分になったことも、しばしばだった。

彼女たちが、主婦の仕事以外に、心理治療士、ソシアル・ワーカー、あるいは教師などのパートタイムの仕事をもったり、ボランティア活動をしたりして社会と接触をもつことによって、社会的存在として自覚しているように思われた。また、夫婦単位の社交の習慣が、女性の能力を驚くほどはっきりあらわしてしまうことが、彼女たちをはりきらせる力になっていることも、事実のようだ。

ある友人の家でのパーティの席で、大学院に在席しているというA夫人が、教育論の問題で、よその御主人と議論になったことがあった。そのとき、A夫人は少し旗色が悪かったけれども、とうとう意地を通し、彼の方は、女性をたてる精神を発揮せずに終わった。

また、私の隣人のB夫人は、七十才代の未亡人だったが、「クリスマスの休暇には、娘の所へ泊まりに行くけど、ひとり暮しが一番いいわ」とあっさり言いきった。女性といえども、自己を第一に考えるという精神を貫くという、しっかりとした姿勢を、私は感じた。

生涯、親とか夫、あるいは子供によりかかって、妥協の中に生きることを自然に受け入れてきた日本の女性を見慣れていた目に、自我のはっきりした異質の女性像が、様々の年代にわたって、身近に見られたことは、まさに衝撃というべきものだった。これは、やはり社会そのものの違いによるものであろうか。

日加国交五十周年

来年は、カナダが日本と国交を樹立してから五十年目に当る。当時、法的にはまだカナダの対外関係を扱っていた英国を除き、日本はカナダにとって、アメリカ合衆国、フランスに次いで三番目に外交代表部(公使館)をおいた国であった。五十周年を記念して、いろいろな計画が立てられている。

カナダ・スキー・ツアー全ガイド

カナダ政府観光局東京事務所では、今シーズンも日本の多くのスキーヤーにカナダの大自然でのスキーを楽しんでもらおうと、「カナダ・スキー・ツアー全ガイド」を発行した。

これは、十二月から来年四月にかけて予定されている主なスキー・ツアーの内容を網羅し、かつ主なスキー場を紹介したもので、希望者には、はがきで申込めば無料で送付している。宛て先は、東京都港区赤坂八―五―三二　山勝ビル　カナダ政府観光局。

老眼にコンタクト・レンズ

遠近両用の二焦点めがねに代わる軟らかいコンタクト・レンズが、カナダで開発された。この一枚レンズは、二焦点めがねと違って、焦点に合わせて目を上下しなくてもすむという利点がある。二焦点めがねをかけている三百人以上の人々にテストしてもらったところ、八十パーセントが何の問題もなく装着できたという。

編集後記

●日大北極点遠征隊に続いて、植村直己さんが北極点に達するなど、今年の日本は北極ブームに湧きました。北極からとり寄せた氷を、お酒の宣伝に使ったところもあったほどです。

●カナダでは、北方が別の意味で脚光を浴びています。ボーフォート海を中心に石油・天然ガスが発見され、埋立て、または氷をさらに凍結して作った人工の島を使って海底の掘削が進められています。本紙第十四号でお伝えしましたように、ボーフォート海からユーコン南部、アルバータ州を通るパイプラインの建設も、米加間で合意されています。カナダ北方の地下資源が注目されるとともに、北方に住むイヌイット(エスキモー)やインディアンの生活、および一帯の生態系に及ぼす開発の影響についても、関心が高まってきました。そこで、本号では、開発とその社会的・環境的影響という二つの観点から、カナダ北方の現状を特集しました。

●文学特集でもとり上げたファーリー・モーワット氏は、北極が北半球の〝中心〟であるというユニークな視点でカナダ北方を紹介しています。日大北極点遠征隊に同行した読売新聞社会部の江本嘉伸氏は、エベレスト登山取材などの経験もあるベテラン記者。北極遠征のルポルタージュ「北極点をめざす野郎たち」(読売新聞社刊)の共同執筆者でもあります。同氏には、遠征中見聞した、カナダ北方の動物と自然のようを書いてもらいました。(吉田)

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を表わすものではないことをお断わりします。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。なお、ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒107東京都港区赤坂七丁目三―三八
カナダ大使館広報部